



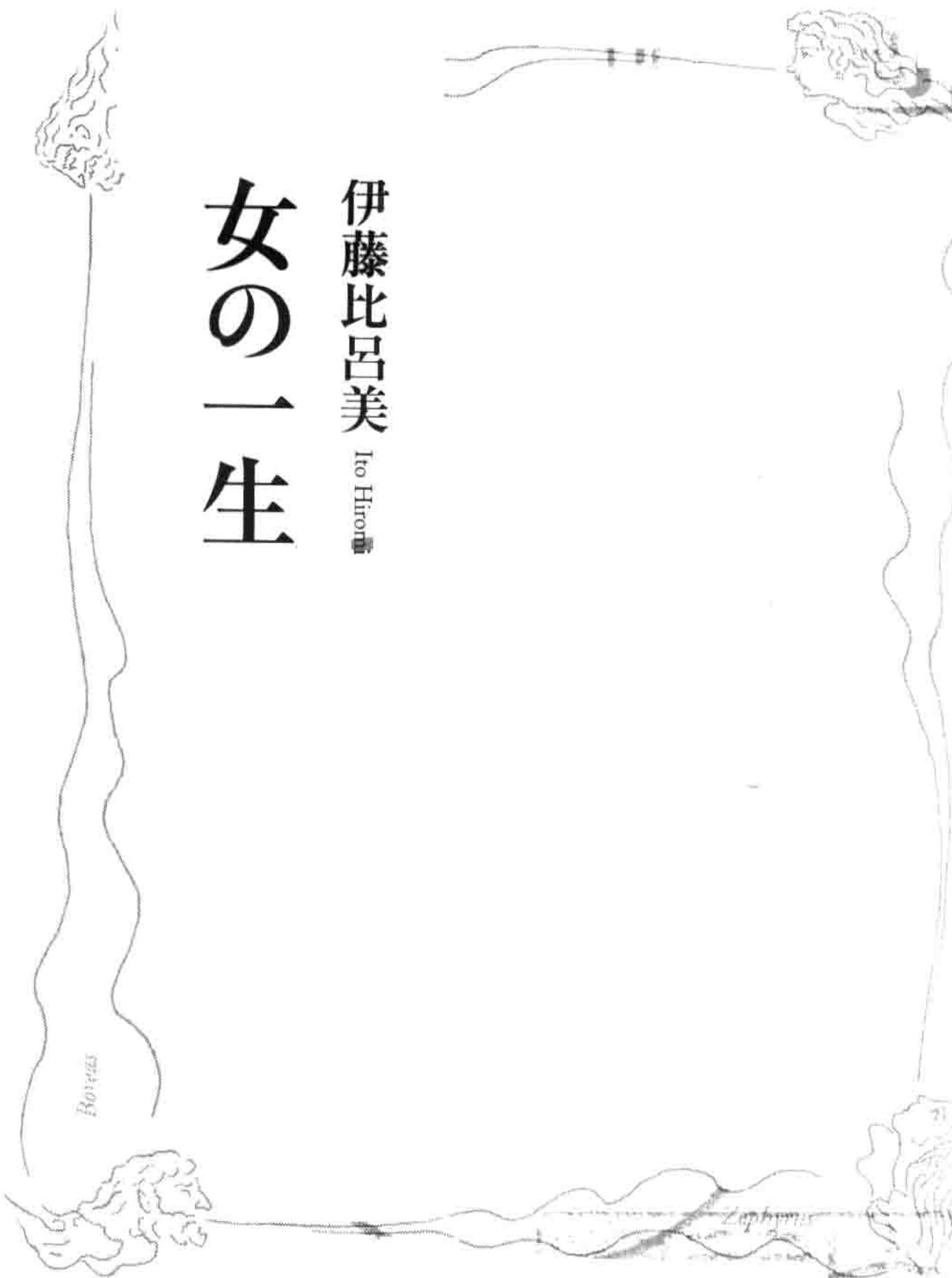
伊藤比呂美

Ito Hiromi

女の一生

岩波新書

1504



伊藤比呂美
Ito Hiroko

女の一生

岩波新書
1504

伊藤比呂美

1955 年東京都生まれ。詩人。

1978 年現代詩手帖賞を受賞し、新しい詩の書き手として注目される。第一詩集『草木の空』（アトリエ出版企画）以後、『青梅』、『テリトリー論』1・2、『伊藤比呂美詩集』などの詩集を発表、『河原荒草』（以上、思潮社）で 2006 年高見順賞、『とげ抜き 新巢鴨地蔵縁起』（講談社）で 2007 年萩原朔太郎賞、2008 年紫式部文学賞を受賞する。1997 年に渡米後、カリフォルニア州と熊本を拠点として活躍。

他に『良いおっばい悪いおっばい完全版』（中公文庫）、『読み解き「般若心経」』（朝日新聞出版）、『閉経記』（中央公論新社）、『犬心』（文藝春秋）、『父の生きる』（光文社）、『木霊草霊』（岩波書店）など著書多数。

女の一生

岩波新書（新赤版）1504

2014 年 9 月 26 日 第 1 刷発行

著 者 いとう ひろみ
伊藤比呂美

発行者 岡 本 厚

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111

<http://www.iwanami.co.jp/>

新書編集部 03-5210-4054

<http://www.iwanamishinsho.com/>

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

© Ito Hiromi 2014

ISBN 978-4-00-431504-9

Printed in Japan

まえがき

生まれてこの方、女であります。昔は若く、今は老いつつあります。女の苦労はたいてい経験してきました。自分であることが一生の命題でした。苦労はそのためにしてきたのかもしれませんが。今では、ものごとがよく見通せます。人の悩みに助言もできるようになりました。

では、自分のことはどうかというと、なかなかむずかしい。自分であることをやめられません。その上、何かにつけ、断ち切るのが苦手です。関わりを次々に作り、断ち切れず、そのひとつひとつと、もがきながら戦ってきました。戦いつつ、いとおしみ、ずるずるとひきずって生きてきました。子どもも、親も、男も、他のいろんな関係も。

わたしが一生を終えたときには、娘も男も友人も、まわりのみんなが一斉に息を吐き、ああたいへんだったと言うでしょう。そのくらいの自覚はあります。

「誰が選んでくれたのでもない、自分で選んで歩きだした道ですもの」というのは、杉村春

子の声で、森本薫の『女の一生』。

「人生つてのは、皆が思うほど良いものでも、悪いものでもないんですね」というのは、モーパッサンの『女の一生』（永田千奈訳）。

帯に短し襷に長し、作者は二人とも男だし。どうせなら自分たちを作りたい。ずっとこの機会を待っていました。更年期も過ぎ、男とも落ち着き、子も巣立ち、親も見送り、一人になり、今なら書けると思いました。

モーパッサンの原題は『ひとつの一生(Une vie)』。ここではたくさん女の声を相談としていただきました。一つ一つの女の一生を聞き取ってまとめあげ、「女(複数)の一生」を語っていかうと思っています。

もくじ

まえがき

おさない女

女の装い／親とは／母と娘／父と娘／誇りに思う／一人っ子／ケン
カ／漫画

1

自分に向き合う若い女

女の装い／母と娘／月経と女／片思い／ダイエット／足が太い／体
臭／性教育／ペニスとヴァギナ／自分／思春期／群れる／仲間はず
れ／成熟／子どもを見つめる

15

たたかう女①——性と女……………37

女の装い／母と娘／月経と女／セックスと女／処女・初体験／恋愛
／コンドーム／自傷行為／摂食障害／遠距離恋愛／未練／嫉妬／一
対一／売春／LGBT／執着する／不倫と女／マスターベーション
／痴漢／娘の恋路

たたかう女②——社会と女……………67

女の装い／地声／母と娘／妻と夫／主婦／仕事と女／泣く女／働く
女／女の利用法／職場と女／近所の目／うつ／うつの友人／女友達
／結婚退職／世間体／夫の転職

たたかう女③——生殖と女……………93

女の装い／母と娘／胎児はうんこ／妊娠／妊娠中絶／分娩／乳をや
る／育児／離乳食／内診／出生前診断／働く妊婦／子連れ／不妊治
療／虐待／三歳児神話／猫／周囲の目

たたかう女④——家族と女……………

117

女の装い／母と娘／結婚／同居・同棲・内縁・事実婚／妻と夫／離婚／子どものいる離婚／再婚／セックスと女／家事(台所)／結婚式／良妻とか賢母とか／浮気と不倫／問答無用の離婚／マザコン／嫁と姑／実家と生家／お墓／夫の尻ぬぐい／父親の死／婚外の関係／女友達／嫉妬の相手／男友達／親の気がかり

自分に向き合う若くない女……………

151

女の装い／美容院／母と娘／妻と夫／妻の自立と夫の自立／女友達／セックスと女／漢(おんな)／更年期障害／年を取る／無常／中年危機／心身の不調／運動／子離れ(空の巣)／引きこもりの子／夢中／孫／閉経／不倫

老いる女

女の装い／死に方／母の頭／生き方の違い／ヘルパーさん／妻と夫
／離婚／捨てられない／ペットロス／女友達／宗教／夜の孤独／気
むずかしさ／認知症の親／認知症の恐怖／排泄／デイケア／母と娘

179

或女の一生

あとかぎ

229

イラスト・伊藤比呂美

207

おさない女



女の装い

「おかあさんがださいＴシャツとか買ってきてきます」 ●12歳

そもそも思春期までは、親に言われるままの格好をしている時期です。それを「ださい」と思うようになったということは、いよいよ思春期に突入のようです。ゾクゾクしますね。（つづく）

親とは

「なぜ親の言うことをきかないといけないんですか」 ●10歳

親とは、育ててくれるありがたい存在ですけれども、ときに、というより、ほとんど、わた

したちに呪いをかける厄介な存在です。その呪いは、親心や親の愛という強力な呪術でできていますから、なかなか解けません。呪いをかけられていることに気づかない子すらいます。その場合は、呪いを解くのがさらに遅れて、さらに厄介なことになります。しかも、呪いが強力であればあるほど、よりいい子に、つまり世間的にも成功するいい子になれます。いい子になると、親の呪いもまたさらに強くなる。呪いが強くなつて、さらにいい子になる。堂々巡りのようですが、そうではない。いずれ、呪いに気がついて、それを解こうとし始めたとき、呪いが強ければ強いほど、解くにも強い力が必要で、力をふりしぼっているうちに、わたしたちも強く鍛えられていくという寸法です。

ですから、十歳くらいのときには、子どもは親の言うことはきかねばなりません。少なくとも「きかねば」という意識は持つていなければなりません。それがそもそも親の呪いです。親の呪いはすでにかけているんですが、まだだれも、それに気づいていません。親もこれは愛であるとかかり信じ込んでいて、呪いとは気づいてません。もしかしたら気づく必要もないのかもしれませんが、少なくともこの時点では。

母と娘

「おかあさんが大好き。おかあさんみたいになりたい」 ●11歳

これは、まどみちおのぞうさん症候群と言われまして（ほんとか？）、子どもは、一時期、ここを通過しないではいけないし、母親は、こんなことを言われると、盆正月に誕生日とボーンスを加えたくらい、うれしい気分になるものです、などと喜んではられません。母には母の責任がある。義務がある。つい肩に力が入ります。肩をいったん持ち上げて、それから下ろしてみてください。力がスツと抜けます。

母は娘には教えたことがいっぱいある。自分の踏んだ轍のいいところは踏んでほしい。よくない轍は踏まないでもらいたい。当然の親心です。しかし同時に、母は母であるというだけで、娘に対して、ふつうの人と人との関係より、ずっと絶対的な、強大な、むこうが否定したくても否定できない立場にいる。

母が娘を「愛する」「期待する」「心配する」のは、娘にとっては「呪われる」「支配される」「つきまとわれる」に近いときもある。民話は、そのへんをしゃあしゃあとお話の中に組み込

んでいきます。民話の母は魔女や継母に姿を変えて、娘を憎み、閉じ込め、追いかけて、殺し、食い、そしておうおうにして娘に殺されます。この腹から生み出し、ふたつの乳房で（伝統的な言い回しでこう言うんですが、もちろんそうでないこともよくある）娘を育てたわたしたちは、もしや、在るだけで、娘にとっては毒なんではないか。

わたしたちが一人一人違う母であるように、娘たちも一人一人違う娘です。どの娘も、どんなかたちであろうとも、一人一人の人生を生き抜こうとしているのであります。

母としては、一人一人の娘たちが、「あたしはあたしだ」という人生の極意をしつかりつかめるように、見守り、受け入れたい。そのためには、いずれ、かわいがったり期待したり心配したりするだけじゃなくて、突き放す、かかわらない、忘れてみるということも、必要になってきます。（つづく）

父と娘

「妻が妊娠中。女の子のようです。ぼくは一人っ子。女の育て方の基本を」 ● 35歳

まあ一人一人違うんですが（模範回答）、ざっくりいえば、女である母親にとっては、くり返される経験です。でも、経験があるだけで、別の人格ですから、ちつとも役に立ちません。気持ちが変わりすぎたり、似てるせいでかえってわからなかったりで、イライラすることも多い。男である父親にとっては初めての経験です。「女の子だから」「女の子のくせに」が禁句なのは、言うまでもないと思います。

あらゆる可能性を与えていたきたい。可能性を前にしたときに、自分が進むかどうかは別にして、女であるからという理由で怖じ気づいたり、ためらったり、あきらめたりすることのないようにしていただきたい。それはもう、ちらりとでも、そんなことのないように。

父親が、女という性を持つ娘を全面的に受け止めているか、家庭の中で女がいかに自由か、身を持つて、いな身を挺して、アピールしていただきたい。まず、妻への態度、家事のやり方、テレビの見方、社会で起こる事件についての意見、等々、生活のすべてにそれは出てきます。

正念場は、思春期です。娘は、成長痛みたいな思春期のむかつきに翻弄される。こっちは若くなくなつて生活全般に疲れてくる。そんな中でガチのぶつかり合いをしなくてはならない。

思春期の若い女は、男という存在、おとこ性というものに対しても、生理的に、そして感情的に、反発してきます。これはもう、父と娘の個人的な関係ではなく、女と男の、種と種の、

代理戦争みたいなもので、不必要に個人的に受けとめてはいけません。代理代理と心で念じて、柳に風で、娘のむかつきを受け流すのが得策です。かといって場から消え去ってしまったのは、それ以降、娘の前に居場所が無くなりますから、逃げないでください。

思春期の娘は、母親にとつても面倒な一時期、父親が「ぜんぶ任す」と逃げてしまったら、母親はつらすぎます。だから逃げないで。かなり痛いけど、攻撃されることをおそれないで。

思春期のむかつきで、とくに気をつける点を二、三あげておきますと、まず、ニオイです。

体臭は、わたしは隠す必要ないと思うのですが、若い女たちがどう思うかまではわかりません。少なくとも、自分のニオイは若い女とは違うということに気がつくデリケートさが、男の方にあってもいい。それから、うんこやおならのニオイ。こちらも隠しきれないものがありますし、「くさいものだ」と気がつけばそれでいい。

そういうものを、「隠さなければならぬ」というのが女の文化であり、そういう文化を社会的に押しつけられてきたわけであり、「隠さなくてよい」というのが男の文化で、男はそこにのうのうとしてきたわけです。何もかにもに反抗したくてたまらない思春期の女は、そんなところにも敏感です。

そしてもつと大切なのは、娘の意見を聞くこと。残念なことに、まだまだ未熟な女ですから、

たいてい幼稚な意見ですけど、聞くまでもないと思わずに、頭ごなしに否定もせず、ただ聞く、とにかく聞く。おれは聞いてると思っただけ、たいていの人は、とくに父親は、聞いてません。幼児の頃は、まだ耳を傾けることができていても、思春期になると、できなくなるのとが多いです。こつちだつて生きてるんだ、そうそう言いなりになつてられるかというそちらの思いもわかりますが、そこをなんとか。

母親としては、自分の舞台（過去数十年、プリマとしておどつてきた）を、ちよつとの間、娘に貸してやる感じですか。たいてい、苦悩しながらも自分の舞台でおどりはじめるんですが、ときどきつまずく子がいます。そういう子に母の舞台を貸してやり、プリマのおどりを身につけさせ、そのあいだ自分は魔女役や民族舞踊のキャラクターダンサー役に徹してみる、とか。……すみません、ここの説明、女の子として、バレエ漫画をさんざん読んできたものだけにわかる説明です。この説明を理解するためにも、バレエ漫画は読んでおきましょうね。

誇りに思う

「『誇りに思う』ってよく聞きますが、これは英語からの直訳？」 ● 30歳